

2024 年度

国 語  
(1 期)

(答はすべて解答用紙に記入すること)

(時 間 50分)

番 号		氏 名	
--------	--	--------	--

清泉女学院中学校

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号もふくみます。)

筆者の松村圭一郎まつむらけいいちろうさんは文化人類学者です。文化人類学とは、人間とはどのようなものを社会や文化の側面から考える学問です。本文において、松村さんは人と人の「つながり」という問題を文化人類学の視点から考えています。

人と関わり、ある集団に身をおくとき、そこに「つながり」が生まれます。ここではこの「つながり」をひとまず「人と関係する」という意味で使います。この「つながり」には、ふたつの働きがあります。存在の輪郭りんかくを強化する働きと、反対にその輪郭が溶けるとような働き。「ともに生きる方法」を考えると、この両方の側面に目を向ける必要がある、というのが私の考えです。

存在の輪郭？ 溶ける？ まだ意味がよくわかりませんよね。

人との「つながり」は大切だ。多くの人はこう考えます。でも、つながっているとはいったいどういう状態なのか、じつはあまり理解されていないように思います。この章ではまず「つながり」によって存在の輪郭が強調される側面について説明していきましょう。

一般的に「つながり」とは、AとBという独立した存在があり、そのあいだに関係が結ばれていること、そんなイメージだと思います。「私はある人と強くつながっている」とか、「人のつながりが薄うすれてきた」という言い方をしますよね。でも、AやBは、最初からAやBとして独立して存在しているのか？ そう考えてみるとどうでしょう。

ある人が「子ども」であるのは、あきらかにその「親」との関係においてです。ひとりで「子ども」であることはできません。「親」も同じです。「子ども」との関係がなければ「親」にはなれません。私たちは、そうしてだれかとの関係において自分らしさを意識しているはずですよ。

つまりAやBは、はじめからそういうものとして存在しているというより、人間関係のなかではじめてAやBであることができる。そう考えられます。ここで重要なのは、AやBという個人ではなく、そのAとBを関係づける「つながり」のほうです。

いま「社会が分断されている」「社会からつながりが失われている」とよく言われます。右派※1と左派とか、国論が二分しているとか、貧富の格差が拡大しているとか、大きな社会問題としてよく耳にします。どうしたら分断を乗り越えられるのか、なぜ社会のつながりが失われてきたのか、議論になっています。

たしかに、とても重要な問題です。でもさきほどのような意味で「つながり」をとらえると、意見の対立や格差の拡大した状態を「つながりが失われている」とは言えなくなります。

「分断」は、かならずしも「つながり」が失われた状態ではない。激しく対立し、分断しているように見えるのは、A 両者がつながっているからかもしれない。そう考えると、世の中が少し違ちがって見えるはずですよ。

かつての社会に分断がなかったわけではありません。おそらくいまよりもっと大きな分断があったはずですよ。さきほど例にあげたように、女性や黒人であるというだけで、政治参加が認められなかった時代のほうが長いわけですから。

グローバル化が進み、情報ネットワークでだれもがつながる時代になってきました。どんな人でも、ネットにアクセスさえすれば、自分の意見を表明することができる。それまではメディアにも注目されず、だれにも耳を傾かたけられなかった声が国境を越えて世界中に拡散する。B、世界はかつてないほど「つながる」時代になってきました。

以前は分断があったことすら意識されなかったはずですよ。奴隷どれいと市民は同じ人間とは考えられていなかった。多くの人は、政治や社会問題に関心を向けることもなく、関心があってもX。それがいまや瞬時しんじに異なる意見がネットを介かして可視化され、その対立が鮮明せんめいに見えるようになりました。それはあきらかに「つながり」の結果でしょう。

AとBは、互たがいにつながった結果として、その輪郭が強調され、存在することができる。右派と左派も、そのつながりの両端りょうたんにあらわれる。異なる意見への反論や批判があつてはじめて、右と左が分かれているように見えるわけで、右も左も、じつはY。

貧富の格差もそうです。貧しさは、豊かさとの対比のなかで強く意識されるようになります。みんなが同じような生活をしていれば、それを「貧しい」とは感じないはずですよ。いまや世界の富の分布や経済水準の差が一目瞭然いちもくりょうぜんに比較ひかくされる時代になりました。昔から変わらぬ生活をしている人たちも、豊かな国の人の暮らしやその富の大きさを突きつけられると、とたんに自身の「貧しさ」を意識するようになります。

つまり、対立や分断しているとされる両者は、互たがいにまったく相容あひれないと思う相手の存在を必要としている。その「つながり」の結果として対立や分断が可視化されている。そう言えるのです。

どうでしょうか？ 「社会が分断されている」「社会からつながりが失われている」という広く共有された世界の見方も、たちどまって考えてみ

れば、異なるとらえ方が可能です。あたりまえに思える言葉や概念がひねんに対して違う側面から光をあて、問いを立てる。もともと文化人類学は、こういうあらたな視点を提示する学問として誕生しました。



ここで、文化人類学の「きほん」をおさえておこうと思います。文化人類学と聞いて、どんなことを思い浮かべるでしょうか？  
アフリカやアメリカ先住民といった、非西洋の「未開」な民族集団を対象にその独特の文化を研究し、異文化比較をする。そんなイメージがあるかもしれません。一九世紀末から二〇世紀前半にかけて、たしかに文化人類学はそういう学問として発展してきました。

アメリカの人類学者マーガレット・ミード（一九〇一〜七八）が一九二八年に発表した民族誌『サモアの思春期』は世界的なベストセラーになりました。ミードは、サモアの少女たちの自由でおおらかな姿から、アメリカの若者が抱える思春期特有の葛藤かつらがけつして普遍的な現象ふへんではないことを示しました。

西洋社会が直面する問題を考えるとき、近代的な視点だけでは限界がある。人類文化の多様性のなかに西洋社会が考えもしなかった別の選択肢せんたくしを見いだすことができる。文化人類学は、近代文明批判の旗手※3として、そうしたある種の希望を語る学問として注目されました。

**C** 一九七〇〜八〇年代、大きな曲がり角を迎えます※4。非西洋の民族には西洋とは異なる文化がある、という単純な話ではなくなってきました。西洋と非西洋、近代と前近代といった二項対立的なとらえ方が批判にさらされたのです。

もつとも有名なのが、エドワード・サイード（一九三五〜二〇〇三）が一九七八年に発表した『オリエンタリズム』です。

「オリエンタリズム」というのは、おおまかに中東から北アフリカにかけてのアラブ世界のことを指します。<sup>②</sup>ヨーロッパでは、長いあいだ、オリエンタリズム※5が芸術や文学の題材とされ、科学的な研究対象にもなってきました。しかし、そこで提示されてきたオリエンタリズムは、たとえば宮廷きやうていのハーレム※6に代表されるような、キリスト教世界から見ると猥雑わいざつで道徳に反した、西洋世界とは対極にあるイメージでした。

ダンテ（一二六五〜一三二一）の有名な叙事詩『神曲』の「地獄篇」では、イスラムの預言者ムハンマドが悪徳のヒエラルキー※7に位置づけられ、地獄の刑吏けいりの鬼おにによっておぞましい罰ばつを受ける様が描写びやうされます。

こうしたイメージは近代の学問でも再生産され、人類学者ラファエル・パタイ（一九一〇〜九六）の著作では、中東文化が豊穡ほうじやくな西洋文明から

学すべき劣った存在とされ、アラブ人には規律や協調性が欠如していると断定的に書かれていました。

ある対象を描いたり、表現したりすることを「表象する」と言いますが、サイドは、そうした異文化の表象に植民地支配につながる権力性や暴力性があると批判したのです。オリエント世界がヨーロッパとは正反対のものとして描かれてきたのは、ヨーロッパ自身の道徳的で文明的な自己イメージを確立するためだった。

(中略)

「かれら」とは違う「わたしたち」をつくりだすために、キリスト教の価値観とそぐわない、近代文明より遅れた社会としてオリエント世界を描く。それはオリエントの姿そのものというよりも、道徳的で文明の進んだヨーロッパという自己像を確立するために一方的に利用され捏造されたイメージにすぎない。だから表象された「オリエント」はヨーロッパの欠かせない一部だったのだ。サイドは、こう批判したのです。

③ さきほどの「つながり」の意味を思い出してみてください。ヨーロッパという「わたしたち」の輪郭が、オリエント世界という比較対象との「つながり」において強調され、はじめて確立されたのです。

それは最初から異なる「オリエント世界」と「ヨーロッパ世界」があって、この二つを比較します、という単純な図式ではありません。「オリエント世界を描く」ことは「ヨーロッパ人が何者であるかを知る」ためにある。つながりをおしてAとBが何者であるかが定まるように、他者表象と自己理解は別々の営みではなく、同時に起きているのです。

④ このサイドのオリエンタリズム批判は、異文化の研究してきた文化人類学に大きな衝撃を与えました。人類学者が「未開社会」に出かけていき、そこで暮らす人びとを固有の文化をもつ存在として描く。それって、ヨーロッパが自分たちのためにオリエントを暴力的に表象してきたことと一緒じゃないか？ そんな反省を迫られたのです。

(松村圭一郎『NHK出版 学びのきほん はみだしの人類学 ともに生きる方法』より一部改変)

- ※1 右派と左派：政治についての考えが、右派は保守的な人、左派は革新的な人。
- ※2 サモア：南太平洋に位置する島々からなる地域・国家。
- ※3 旗手：先頭になって率いていく人。
- ※4 二項対立にこう：二つのものが対立しているように考えること。
- ※5 ハーレム：女性たちの部屋、後宮。日本での「大奥おおおく」のようなもの。
- ※6 猥雑わいざつ：雑然として下品な様子。
- ※7 ヒエラルキー：階級や階層、上下関係。ここではその最上位。

問一 — 線①「つながっているとはいったいどういう状態なのか」とありますが、筆者は「つながり」をどのように考えていますか。本文の最

初から☆までの間から考えられるものとして、ふさわしいものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人は他人と「つながり」を持つことで、自分らしさを意識することになる。
- イ 独立して存在している二人の人間の間に関係を結ぶことが「つながり」の役割である。
- ウ 「つながり」とは人と人が「親」と「子」のように友好的な関係を保っている状態のことである。
- エ みなが同じような生活をしてきた昔と比較し、現代は「つながり」が失われた時代である。
- オ 分断は「つながり」が失われた状態ではなく、むしろつながっているから分断が生まれるといえる。

問二 A C に入る言葉としてもっともふさわしいものはどれですか。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそ

れぞれ一度しか使えません。)

- ア もし                      イ むしろ                      ウ たとえば
- エ なぜなら                  オ ところが                      カ つまり

問三 

X
---

 と 

Y
---

 に入る言葉としてもつともふさわしいものはどれですか。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

X ア その声を伝達する余裕よゆうがなかった

イ その声を問題視する人がいなかった

ウ その声を表明する場や手段がなかった

Y ア 対立した意見をもつ相手がなければ存在しえませんが

イ 対立した意見をもつことで、異なる意見を認識できます

ウ 対立した意見によって、相手の輪郭りんかくを強調させようとしているのです

問四 — 線②「ヨーロッパでは、長いあいだ、オリエント地域が芸術や文学の題材とされ、科学的な研究対象にもなってきました」とありますが、そのことについてサイドはどのように批判していますか。次の空らんらんに、指定された文字数の言葉を本文からぬき出して入れ、文章を完成させなさい。ただし、本文の☆以降からぬき出すこと。

ヨーロッパがオリエント地域を 

I
---

 二十七字 と表象することによって、ヨーロッパの 

II
----

 十四字 を作り出していた。その点において、「オリエント」とはまさにヨーロッパにとって 

III
-----

 七字 であつた。

問五 — 線③「さきほどの「つながり」の意味を思い出してみてください」とありますが、筆者がここで思い出してほしいという「つながり」の意味とはどのようなものですか。本文より十二字でぬき出しなさい。

問六——線④「このサイドの大きな衝撃しんげきを与あたえました」とありますが、なぜ文化人類学者は衝撃を受けたのですか。次の中からもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア ダンテの「神曲」のような有名な芸術作品でさえも批判したことに驚おどろいたから。

イ 文化人類学者が自分たちに都合の良いようにオリエントを扱あつかってきたと批判されたから。

ウ オリエント地域の猥雑で反道徳的なイメージがうそであるということを教えられたから。

エ 文化人類学が近代文明批判の旗手であることを否定されてしまったから。

オ 異国の人々を調査し描き出すことは、結局自分たちのためではないかと気づかされたから。

問七——線「かつての社会に分断がなかったわけではありません。おそらくいまよりもっと大きな分断があったはずですが、かつての社会の方が大きな分断があったが、今の社会のほうが分断しているように見えるのはなぜですか。七十五字以上一〇〇字以内で説明しなさい。

問八 次の記号のうち、本文の内容に合うものには「○」、合わないものには「×」と答えなさい。

ア 二十世紀前半のアメリカの人類学者には、異国の人々とアメリカ人との文化的な共通点を探し出すことによって、かえってアメリカやアメリカ人がどのような存在であるかを示そうとする人もいた。

イ サイドによれば、ヨーロッパが熱心にオリエントを芸術の題材や研究対象にしたことは、ヨーロッパによるオリエントの植民地支配を正当化することにつながっていくものであった。

ウ 現代社会においては、かつての社会に比べて貧富の格差の増大や右派と左派の対立など、分断や対立がみえやすくなった。その結果として、人々がかつてないほど他者と「つながる」時代になってしまった。

エ 他者について表象することは、自分との違いを示すということでもあり、その点においては他者について表象することと自分がどのようなものを理解するということは同時に行われていることである。



〔二〕

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

義父から教えてもらった「認知症本人ミーティング」は、義父の住む地域で活動していたので、自分たちの市にもあるのではないかと検索した。早速に出てきた。どうやら認知症の本人自らが主催している、認知症本人が集まるミーティングらしい。

ただ、「認知症本人が主催」といっても、その実態は形だけだと容易に想像出来た。認知症本人に出来ることは限られているだろう。きっと場所を貸している役所が、実際は運営しているに違いない。

何をするのかは、全く想像出来なかった。お茶とお菓子でおしゃべりをするとか、何か体操とかレクリエーションをするのだろうか。お年寄りが集まるデイサービスののような可能性もある。それでも何かの刺激になればと思いい、気の進まない晃一をなんとか連れてきた。

「会場、三階みたいよ」

私が明るく言っても、晃一はいかにも面倒だという風のため息をついた。

三階にある会議室を覗くと、会議テーブルが口の字型に並べられていた。中に、二十人ほどがいる。七十代が中心だが、四、五十代も数名いるようだ。テーブルの後ろの壁沿いにもいくつか椅子が並べられていた。そこにも十人ほどが座っていた。皆、移動したり、立ったまま談笑している。なるほど、「本人ミーティング」という名前だが、やはり家族も同席しているのだ。いや、圧倒的に家族の方が多い。さすがに認知症本人だけでは無理なのだ。

後ろを振り返ると、晃一も訝しそうに部屋の中を覗いていた。中央のテーブルで手元の資料を読んでいた五十代後半らしき女性がこちらに気づいた。軽く会釈をして、笑顔で近づいてきた。

「只野晃一さんですね？」

私が代わりに答える。

「あ、はい。そうです」

「進行役の藤本和子です」

「只野真央です。主人の晃一です。今日はよろしく願います」

「晃一さん、よろしく願います！」

和子は晃一の握手を求めて、大袈裟に右手を差し出した。晃一は戸惑いつつ応じていた。和子のその手の指には、品のあるベージュのネイルが塗られていた。クリーム色のジャケットと中の白シャツとのバランスは清潔感に溢れ、いかにも司会者という感じだ。少し茶色に染められた髪は綺麗にまとめられ、メイクも派手すぎず、とても好感が持てた。

私はちゃんと進行役がいたことに安心し、和子に言った。

「認知症ご本人の集まりといっても、やっぱり皆さん、ご家族と一緒になんです。安心しました」

「いえいえ、こちらにいらっしゃる方はほとんどが、認知症ご本人ですよ。私も含めて」

「え？」

② 私と晃一は同時に小さな声を出して、和子を見た。和子はニコニコと笑っている。改めて中の参加者たちを見渡す。一見、誰も認知症には見えない。驚いた。晃一も驚いていた。

「さあ、どうぞ」

和子に誘導され、晃一と一緒に入ろうとしたが、「ここからはお任せください」と私だけが止められた。いや、晃一は認知症なのだ。一緒にいないと何かあったら困る。

「主人は認知症なので」

③ そう言いかけたが和子は遮った。

「大丈夫ですから」

その迫力に動けなくなった。

和子は晃一と部屋に入ると、ゆっくりと扉を閉めた。扉の上部はガラス窓になっており、部屋の中を見ることが出来る。和子に促されてテーブルに座る晃一の姿を見ながら、やはり不安は消えなかった。晃一の視界に入らない位置に立ち、扉の窓から中の様子を見ながら聞き耳を立てていた。

ミーティングは和子による本人ミーティングの活動報告から始まった。

和子の話では、認知症本人たちの声を集めて、市に様々な提言をしているらしい。その提言を受け入れて、市が施策を検討していること、また、

同じような取り組みをしている自治体が全国に増えていると語っていた。今後は国に対しても提言していくという。そのためのグループを全国都道府県を跨いで作るといふ。

しかし、認知症の本人にそんなことが可能なのだろうか。④にわかに信じられなかった。晃一の様子を見た。その横顔しか見えないが、首や体を頻繁に動かしている。明らかに X そうだ。貧乏ゆすりをして、イライラしていることが伝わってきた。

活動報告が終わると、和子の仕切りで参加者の近況報告が始まる。

最初に立ち上がり話を始めたのは、七十代の女性だった。

「住原治子といます。七十二歳です」

治子は、先月、福岡県で開催された認知症関連のシンポジウムで認知症本人として壇上上がり、一人で講演したという。七十代の認知症の本人が、大きな会場で大勢の人の前で話をしたのだ。しかも、福岡まで一人で飛行機に乗っていったのだという。

「空港ターミナルを間違えて大変でしたよ。なんとかまりましたけどね」

そう言うと、治子はあっけらかんと笑っていた。また、娘さんが内緒で会場に参加していたらしく、講演が終わったあとは、サプライズで花束を渡し、「自慢の母です」と言ってくれたという。

「一生の思い出が出来ました。認知症になった当初は、想像も出来ませんでした」

治子はそう言って、涙ぐんでいた。認知症になっても、こんな風に行動出来る人もいるのか。しかも、彼女は七十代だ。私は少し感動していた。晃一はどう思っているのだろうか。晃一の方を見た。視線を落とし、何かを考えているようだがその反応は分からなかった。

和子が続いて言った。

「加藤さん、久しぶりに近況報告どうですか？」

「あ、分かりました」

六十前後の男性が立ち上がった。紺のジャケットを着て、髪の毛多くは白髪になっているが、きつちりと整えられている。笑顔が穏やかで、初老のサラリーマンという感じだ。

「ええ、初めましての方、加藤と申します。よろしくお願ひします。この会に参加して、五年？ いや、六年、ま、どっちでもいいか」

加藤が屈託のない笑顔で笑うと、会場も少し笑いに包まれた。晃一を見ると、上を見上げて腕を組み大きなため息をついていた。やはり、  
X のだろうか……

「仕事は、奥山製造の営業をしています」

その一言で、晃一は驚いたように加藤の方を見た。

「ずっと、トップ営業マンだったんです。毎年表彰されて、会社からご褒美に旅行をプレゼントしてもらったり……。でも、認知症になっちゃって。お客様の名前や顔が覚えられなくなって、迷惑をかけたり、上司に叱られたりして。だから、いろいろ工夫をしました」

加藤はテーブルの上に置いていたノートを取り上げて、話を続けた。

「自分のノートを作って、忘れないようになんでもメモしたり。そうしているうちに周囲もいろいろ理解してくれて、おかげで今も営業として働いています。何とか定年まで勤めることが出来そうです。今、休日はボランティアとして認知症の方々の相談にも乗っています」

晃一を見ると、真剣な表情で加藤を見ていた。

「もちろん、以前通りには行きませんが……。まあ、休み休み、そんな感じですかね」

加藤は最後にまた屈託のない笑顔を見せて、話を終えた。晃一はまだ興味深そうに加藤を見ていた。その様子を見ていた和子が言った。

「只野さん、どうですか？ 少しお話ししてみませんか？」

晃一は驚き、「とんでもない」という風に頭を振った。

「何でもいいですよ。今、思っていることで」

隣の男性にも「何でもいいんだよ」と促された。皆が拍手をした。晃一は少し戸惑いながら立ち上がる。

「只野晃一と申します。三十九歳です」

晃一はゆつくりと話し始めた。

「五年くらい前から物忘れが酷くなって、数ヶ月前に病院で検査を受けたら、若年性アルツハイマー型認知症だと診断されました。正直もう、毎日が不安だらけで、これからのことを考えると怖くて怖くて、頭がおかしくなりそうです。でも妻や同僚たちの支えで何とか頑張っています。特に、妻には、本当に感謝しています。妻がいないと今頃どうなっていたか……」

晃一の声を聴きながら、嬉しくて涙が溢れてきた。やはり、自分の気持ちは晃一にちゃんと伝わっていたのだ。

「でも、でも、私だって出来ることがある。まだまだたくさんある！ 認知症と診断された日から、家族も世界も全て変わりました。僕は、ずっと僕のままなのに……。みんな優しくしてくれるけど……。でも、みんな、心配してそうしてくれているから何も言えなくて……。だから、仕事も辞めるしかなくて……。何より、妻にはとにかく、迷惑をかけたくないから……」

晃一は泣いていた。私は呆然となった。晃一の気持ちを何も理解していなかったのだ。認知症になったから、「何も出来ない」と決めつけていた。そのことずっと晃一を傷つけていたのだ。晃一は心配している私を気遣い、何も言えなかったのだ。今までの晃一とのやりとりを思い出しながら、私はその全てを間違えていたことに気づいた。

「ダメだ。こんな話をして意味がない……」

晃一は我に返り、吐き捨てるようにそう言っただけで座り、また下を向いてしまった。和子が晃一に言った。

「只野さん、その気持ち、奥様に伝えてみませんか？」

晃一が和子を見た。

「私も、ここにいる皆も、初めは只野さんと一緒だったんです。出来ることを取り上げられて、病人として扱われても、周りに気を遣って何も言えなかったんです。『困った時だけ助けて欲しい』って言えなかったんです。周りに、私たち自身の気持ちを伝える勇氣も、必要なんです。伝えてみませんか？ その気持ち」

晃一は和子から視線を外した。心はまだ揺れているようだった。

全部間違えていた。私が今まで良かれと思ってやってきたことは、全て裏目に出ているのだ。<sup>⑦</sup>あの料理も、あの本も、靴に書いた名前も、コーヒーを取り上げたことも……。全部間違えていた。彼からいろんなものを取り上げていたのに、気を遣って私に何も言えなかったのだ。晃一のこととは、自分が一番分かっていると勝手に思い込んでいた。認知症のことも、晃一のことも全く理解出来ていなかった。認知症と診断されたあの日から、ずっと彼を傷つけ、苦しめ続けてきたのだ。

〈ごめんなさい……〉

<sup>⑧</sup>晃一の抱えてきた悲しみを想像すると、涙が止まらなかった。

その後、二人の認知症本人の近況報告が続き、一時間ほどで本人ミーティングは終了した。

扉の外で待っていると、次々と参加者たちが出てきた。家族が迎えにきていた参加者もいたが、その多くは一人で帰っていった。ただ、参加者の流れが終わっても、晃一が出てこない。会場の中を覗くと、晃一は加藤と二人でテーブルに並んで座っていた。何だか楽しそうに話している。加藤のノートを見ながら、いろいろ質問しているようだ。「なるほど」と加藤の説明に何度も相槌を打ったり、二人で大笑いしている。あんなに楽しそうな表情をする晃一を見るのは、本当に久しぶりだ。こちらまで嬉しくなってくる……。

「Y したみたいですね」

和子が会場から出てきて、話しかけてきた。私は軽く頭を下げた。

「それに楽しそう」

「主人は営業で、人と話すのが大好きで……。なのに、私、いつの間にか一方的に何も出来ないみたいに決めつけてしまっていて……」

「分かります。それは心配ですから。家族としては当然です。でも、家族の中で、お互いがお互いを気遣うことで、負の連鎖が起きてしまうこともあるんです」

⑨ 負の連鎖……、まさに今の私と晃一の状態だった。

「私、これからどうしたらいいでしょう？」

「大丈夫！ 認知症になっても、人生終わりじゃありませんから」

「終わりじゃない——」

「はい！」

和子は笑顔で大きく頷き、「では」と軽く会釈をして去っていった。

私はハッとしたり。和子も認知症の本人なのだ。福岡で講演したという七十代のあの治子も、目の前で晃一と話している加藤も、今日参加していた人たちも。

今まで自分が想像していた認知症の本人のイメージとは、大きく違っていた。そして、晃一の本当の気持ちも……。私はやはり何も分かっていたなかった。勝手に認知症の人のイメージを作り上げていた。このままではだめだ。考え方を変えなければならぬ。

私自身に、認知症に対する Z があつたのだ……。

しばらくすると、晃一と加藤が一緒に会場から出てきた。晃一は、扉の外で待っていた私を見て、加藤に紹介してくれた。

「妻です」

「ああ、奥さんですか。すみません、つい話し込んでしまって」

加藤はまた、あの屈託のない笑顔を見せた。

「いえいえ、主人がこんなに楽しそうにしている姿を見るの久しぶりで」

私が答えると、「ああ、良かった」と加藤はまた笑った。そして、何かを思い出したように言った。

「あ、そうだ。お二人とも、週末とか空いてませんか？」

晃一と顔を見合わせて、「あ、はい」と答えた。

(山国秀幸『オレンジ・ランプ』より一部改変)

※ あの料理も、あの本も、…晃一が認知症と診断された後、「私」が認知症に効果があると思つて購入した食材や本のこと。

問一 — 線①「訝しそくに」、④「にわか」に、⑤「屈託のない」の意味としてもっともふさわしいものはどれですか。次の中からそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。

① 訝しそくに

ア 疑わしく思う様子で

イ あいまいな様子で

ウ 予想とは違う様子で

エ あきらめた様子で

オ 不安を感じた様子で

④ にわか

ア 少し

イ すぐに

ウ まったく

エ はつきりと

オ 絶対に

⑤ 屈託のない

ア 素直でない

イ 気力も体力もない

ウ うそいつわりのない

エ 疲れることがない

オ くよくよすることがない



問二——線②「私と晃一は同時に小さな声を出して、和子を見た」とありますが、「私」の気持ちとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 認知症本人主催というのは形式上だと思っていたが、実際は認知症本人たちが運営していることに驚いた。
- イ 認知症本人の家族が同席していると思っていたが、実際には家族は会議を見るだけだということに驚いた。
- ウ 認知症本人がレクリエーションをするだけだと思っていたが、実際に会議をしていることに驚いた。
- エ 認知症本人は人生に絶望していると思っていたが、実際の認知症本人は明るい印象であることに驚いた。
- オ 認知症本人だけでは何も出来ないと思っていたが、実際には認知症本人が司会者になれることに驚いた。

問三——線③「そう言いかけたが和子は遮まぎった」とありますが、和子の思いはどのようなものであったと考えられますか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 認知症本人たちだけでも、国に提言できるぐらいの会議ができることを証明したい。
- イ 認知症本人を扱うためには、認知症に慣れている人だけが会議の場にいた方がよい。
- ウ 認知症本人だけの場を作ること、本人同士が思っていることを話せるようにしたい。
- エ 認知症本人だけでは何も出来ないと思っている人たちに、会議の進行を邪魔じゃまされたくない。
- オ 認知症本人以外の人が入ると、認知症本人が主催したことにならないので参加してほしくない。

問四 本文に二か所ある X には同じ言葉が入ります。その言い切りの形としてもっともふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 興味深い
- イ 情けない
- ウ 疑わしい
- エ つまらない
- オ 楽しい

問五 — 線⑥「こんな話をしても意味がない」とありますが、どういうことですか。もつともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 認知症の人が積極的にできることをしようとしても状況は変わっていかないということ。
- イ 認知症になって感じた不安や苦しみを率直に語っても状況は変わっていかないということ。
- ウ 妻や同僚たちの支えに対する感謝の思いを伝えても自分が報われることはないということ。
- エ 妻や同僚たちに迷惑をかけないように工夫しても自分が報われることはないということ。
- オ 認知症の本人同士のグループに進んで参加しても状況は変わっていかないということ。

問六 — 線⑦「全て裏目に出ているのだ」とありますが、どういうことですか。もつともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 晃一が面倒だと思うことを先回りして取り除いた「私」の行動の全ては、晃一にとって必要のないものであったということ。
- イ 晃一の不安に寄りそう「私」の姿勢が、認知症によって何も出来なくなったという思いを晃一に抱かせてしまったということ。
- ウ 晃一のことを大事に思っただけで「私」がやってきたことは、晃一が望まないものであり、晃一を苦しめ続けてしまったということ。
- エ 晃一の一番の理解者であるために「私」がおこなったことは、晃一にとって都合なものであり、迷惑をかけてしまったということ。
- オ 晃一が認知症と診断されてから治療のために「私」が取り入れたことは、晃一の症状の改善に役立つものではなかったということ。

問七 — 線⑧「晃一の抱えてきた悲しみ」とありますが、どのような悲しみですか。解答らんにあてはまるように、本文から四十一字でぬき出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問八 Yに入る四字熟語として、もつともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 意気投合
- イ 一喜一憂
- ウ 心機一転
- エ 以心伝心
- オ 四苦八苦

問九 — 線⑨「負の連鎖……、まさに今の私と晃一の状態だった」とありますが、「私と晃一」のどのような状態を「負の連鎖」と言っているのですか。「負の連鎖」の言葉の意味をふまえながら、八〇字以上一〇〇字以内で説明しなさい。

問十 Zに入る言葉として、もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 反省      イ 主観      ウ 関心      エ 葛藤<sup>かつとう</sup>      オ 偏見<sup>へんけん</sup>

問十一 この文章の構成や表現に関する説明としてふさわしいものには「○」、ふさわしくないものには「×」と答えなさい。

ア ミーティングに対して初めは期待していなかった「私」と晃一が、それぞれの気づきを得ることによって大きく変化する姿を「私」の心理とともに描き出している。

イ シンポジウムでの講演をやりとげた治子の近況報告とそれを熱心に聞く晃一の姿を細やかに描き出すことで、晃一の認知症に対する理解の深まりを印象付けている。

ウ 地の文や会話文で「……」を多く用いることによって、「私」や晃一の抱えている不安やためらいの気持ちを具体的にくわしく説明する効果を生んでいる。

エ 「認知症本人ミーティング」以外で晃一の言葉をほとんど描かないことにより、ミーティングで晃一が自分の思いを告白している姿をきわだたせている。

オ 晃一が泣いている場面になって「〜のだ」という断定の表現が目立つようになるのは、「私」の晃一を愛する思いが強まったことを強調するためである。

〔三〕

次の(1)、(2)にそれぞれ答えなさい。

(1) 次の四字熟語の□に同じ漢字が入るものはその漢字を答えなさい。また、同じ漢字が入らないものは「×」と答えなさい。

- ① □材□所  
② 起□転□  
③ 大□小□  
④ □体□命□  
⑤ □長□短□  
⑥ □往□往□  
⑦ □思□愛□

(2) 次の―――について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに、それぞれ改めなさい。

- ① データのスイイを確認する。  
② 教授は江戸時代をセンモンに研究している。  
③ この仕事は大変なロウリヨクがかかった。  
④ 横浜でハ克蘭カイが開かれる。  
⑤ コンクリートの上に土をモる。  
⑥ 天井から水がタれる。  
⑦ 老人を敬う精神を持つ。  
⑧ チームの要になる選手。